

道元禅師の教えの仏教保育への展開に関する考察

—『典座教訓』を中心にして—

岡 本 啓 宏

A Study on the Influences of "Tenzokyoukun" by Dogen Zenji in Buddhism Childcare and Childcare Development.

Keikoh OKAMOTO

論文要旨

平成二十五年十二月四日、「和食」がユネスコ無形文化遺産に正式に登録され、⁽¹⁾「和食」が世界的に更なるブームとなっている。日本国内においても「和食」を改めて見直す風潮が起って来ている。そのような中で保育現場においても日々の食事、そして「食育」の重要性を再認識する必要性が出て来ているといえる。そこで長い歴史を持つ日本人の「食文化」のルーツを、禅の教えを説く道元禅師の『典座教訓』の中に見出すことができる。⁽²⁾ 本論では、この『典座教訓』の教えが、仏教保育の現場にどのように展開することができるかを考察するものである。その際、仏教の各宗派を超えた活動をしている公益社団法人日本仏教保育協会⁽³⁾ が定義している「仏教保育綱領」の三項目に従って、『典座教訓』の教えの内容の分類を試みた。その結果、『典座教訓』の教えが日本仏教保育協会の「仏教保育綱領」の三項目にそれぞれ対応し、仏教保育の指標となる教えの内容であり、この『典座教訓』の教えは保育の現場においても通じる教えであった。さらにこの『典座教訓』の教えは、私たちの食生活に多くの示唆を与えるのみならず、時代を超え、現代社会において人々を導き、人生の指標となる教えであるといえる。

キーワード 典座教訓、道元禅師、仏教保育、仏教保育綱領

1. はじめに

今日、「和食」が世界的に大ブームとなっている。平成二十五年

十二月四日、「自然を尊ぶ」という日本人の気質に基づいた「食」に関する「習わし」を「和食：日本人の伝統的な食文化」と題し、「和食」

がユネスコ無形文化遺産に正式に登録され、「和食」の世界的なブームに拍車をかけた。世界中の国々の主要な都市では、寿司を主流に日本食レストランが数多く営業し、世界的な健康志向も相まって日本食を食べる人々が一層増えている。このユネスコ無形文化遺産登録に際し、農林水産省では、「和食」の四つの特徴を挙げて、登録のためのPR活動にあたった。その四項目は次のとおりである。

- ①多様で新鮮な食材とその持ち味の尊重
- ②健康的な食生活を支える栄養バランス
- ③自然の美しさや季節の移ろいの表現
- ④正月などの年中行事との密接な関わり

これらは日本の「和食」の文化の特徴を端的に、そして明確に表しているといえる。

この日本の和食文化に大きな影響を与えたものの一つとして、道元禅師の『典座教訓』を挙げることができる。この『典座教訓』の教えの中には前記の「和食」の特徴の四項目の考え方がすでに説かれており、日本人の「食文化」のルーツを、『典座教訓』の中に見出すことができる。この道元禅師が説く『典座教訓』の教えが、今日の日本の「食文化」に通じ、私たちの食生活に多くの示唆を与えるものである。

また、二十年程前に「輸入してまで食べ残す、不思議な国ニッポン」というコマーシャルがテレビで盛んに流れていた。それは当時の日本人の「食文化」に対する痛烈な風刺を込めたものであり、高度経済成長を経て大量生産、大量消費をしている日本人の「食文化」を批判したものであった。仏教の教えの中に「少欲知足」という教えがあり、それは人間の際限ない欲望に対する愚かさ、戒めの教えであり、『典座教訓』の中でも一貫して説かれている教えの内容である。この大量

生産、大量消費の流れは、時代とともに度々見直されながらも現代まで継続されてきているといえる。

そのような状況の中でこの日本人の食文化が将来を支える乳幼児にも、少なからず影響を与えているのが現実である。乳幼児の食生活においては、特に細心の注意と配慮が必要であり、さらに保育の現場においても同様に考えなければならない。そして保育の現場における「食育」の重要性は周知のとおりである。『幼稚園教育要領』には、「(4)健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、進んで食べようとする気持ちや育つようにすること。」⁽⁴⁾と述べている。また、『保育所保育指針』には「保育所における食育は、健康な生活の基本としての「食を営む力」の育成に向け、その基礎を培うことを目標として、次の事項に留意して実施しなければならない。(一)子どもが生活と遊びの中で、意欲を持って食に関わる体験を積み重ね、食べることを楽しみ、食事を楽しみ合う子どもに成長していくことを期待するものであること。(二)乳幼児期にふさわしい食生活が展開され、適切な援助が行われるよう、食事の提供を含む食育の計画を作成し、保育の計画に位置付けるとともに、その評価及び改善に努めること。(三)子どもが自らの感覚や体験を通して、自然の恵みとしての食材や調理する人への感謝の気持ちや育つように、子どもと調理員との関わりや、調理室など食に関わる保育環境に配慮すること。」⁽⁵⁾とそれぞれ述べられ、「食育」の重要性を強調している。

この「食育」という言葉は今日一般的に用いられている言葉である

が、「食育」という言葉や、考え方は近年生まれたものではなく、それは明治時代にまで遡ることができる。日本で初めて「食育」という言葉を使い、その考え方を人々に伝えたのは、明治時代の陸軍少将薬劑監石塚左玄氏（一八五一―一九〇九）であると言われている。石塚左玄氏は、一八九八年『通俗食物養生法』において、「今日、学童を持つ人は、体育も知育も才育も全て食育にある」^⑥と記し、子育ての大前提、基盤として「食育」があると述べている。

爾来、乳幼児の健全な発達において、この「食育」がとても大切であるということが強調されてきている。そこで、本論では仏教保育の観点からこの「食育」について、道元禪師の「食」に対する教えが説かれる『典座教訓』をもとに、道元禪師の教えがどのように、具体的に仏教保育に展開することができるとかを考察するものである。

2. 仏教保育とは

仏教保育とは、一般的に仏教寺院などを中心に設立、運営されている幼稚園、保育所で実践されている保育であるということが出来る。しかし、これらの幼稚園、保育所においても『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』という国が示す基準に従って保育が展開されているもので、公教育の性質も同時に含んでいる。仏教保育と言っても一般の保育の目標と全く別なものを求めているものではない。特に公的認可を受けている幼稚園、保育所においては、保育内容も『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』に準じ、園舎、園庭、幼稚園教諭、保育士の定数を充足するなど、種々の公的基準を満たすことが必要となり、これらの基準を満たして運営している園が多い。

それでは仏教保育とはどのような保育であるか。この仏教保育につ

いては様々な定義がなされ、一定したものではない。杉原誠四郎氏は「仏教保育とは、広く仏教の原理によって成り立っている保育である。単に一般の保育に仏教保育という特別な保育を付加した保育ではない。広く仏教の原理に立って、「人格の完成」へ導くのが仏教保育である。」と定義している。^⑦ また、『月刊仏教保育カリキュラム』（一九九八年八月）には、「仏教保育は、仏教という宗教を基盤として、仏教の説く教えを生かした保育ということです。」と定義している。^⑧ また、佐藤達全氏は「仏教保育を「いのちを大切にしましょう」というお釈迦さまの教えを、保育者がみずから実践することによって子どもたちの心に育てていこうとする保育」と定義している。^⑨ この他にも仏教保育についての定義は数多くなされている。^⑩ 本論では、上記の各定義を踏まえ、仏教保育とは、「仏教的人格の完成をめざして、仏教の教えを通して、乳幼児の身心の発達を促し、個々の本質を探究し、全ての生き物の命の尊厳を尊ぶ心を育てる保育」と捉えていく。

保育とは、就学前の乳幼児の身心の望ましい発達を援助する営みであり、この仏教保育においても同様である。そうであれば、一般の保育と仏教保育との差はどこにあるのかということが常に問われる。それ故に、一般の保育との差別化を図る必要がある。仏教保育においては、単に仏教の教えに基づいているという漠然とした保育内容ではなく、杉原誠四郎氏が「仏教保育とは、広く仏教の原理によって成り立っている保育である。単に一般の保育に仏教保育という特別な保育を付加した保育ではない。広く仏教の原理に立って、「人格の完成」へ導くのが仏教保育である。」^⑪と述べているように、より具体的に、すぐれた仏の教えが子どもの体と心に浸透し、その保育方針が保育全体を貫くように設定することが必要である。そして仏教保育を通じて、

子どもの身心の望ましい発達のために援助することが大切で、仏教の教えを通して仏教的人格の完成をめざし、個々の本質を探究し、生命の尊厳の心を育てていけるような保育を実践していく事が大切である。そこに一般の保育との違いがあり、仏教保育の存在意義があるといえる。

3. 『典座教訓』とは

『典座教訓』は、日本曹洞宗の開祖である道元禪師（一二〇〇～一二五三）三十七歳の時の著作である。道元禪師は、鎌倉時代の初期一二〇〇年（正治二年）正月二日（陽暦一月二十六日）京都で誕生になりました。道元禪師は高貴な家系に生まれ、何不自由のない生活をしておりましたが、幼くして両親を失い、世の無常を觀じて出家しました。そして真実の仏法を求め比叡山を中心に修行を続け、さらに諸方に道を訪ねましたが、人生の根本的な疑問の解決をすることができず、当時の仏教の本場である中国（宋）に、その求道の志を向けるようになり、中国に渡り、本格的な仏道修行を開始しました。五年間の中国滞在中に、諸山を歴訪し、修行を重ね、天童山において如浄禪師に師事し、昼夜を分かつ、全てのものを学び取ろうとする姿勢で修行に打ち込みました。その結果二十八歳の時、如浄禪師から「身心脱落」の境地を傳承し、正伝の仏法を受け継ぐことになりました。悟りをえた道元禪師は入宋の目的を果たし、五年の修行を終えて帰国しました。日本に戻った道元禪師はしばらく建仁寺に身を寄せ、如浄禪師から受け継いだ正伝の仏法を、ひとつの形にまとめ上げ、『普勸坐禅儀』^②などを著しました。そして建仁寺の典座職の仕事内容を見るにつけて、中国留学時代の典座のあり方との落差を憂い、一二三七年（嘉禎三年）春、興聖寺にて『典

座教訓』を著し、その典座の仕事の重要性を強調し、禪宗寺院における修行生活を細かく、厳格に規定しました。

「典座」とは、禪宗寺院における六知事（都寺、「監寺」、「副司」、「維那」、「典座」、「直歳」）の中の一つで、修行僧の食事の供養や、仏や祖師のための供膳を司る役職のことであり、道元禪師が中国での修行中に、歴代の典座職が禅修行の本質に達している事を体得したことにより、その典座職の重要性を特に強調して説いているものである。

この『典座教訓』の内容は、禅の修行道場における典座の職責の重要さと、典座の仕事そのものが自己の修行に他ならないということが説かれている。さらにその内容を大別すると次の三つに分けることができる。

第一、典座の仕事内容についての詳細な解説

第二、道元禪師の中国留学中の修行体験と歴代祖師の故事に基づく

典座職の大切さについての解説

第三、三つの心構えである「三心」（「喜心」・「老心」・「大心」）についての解説

そして『典座教訓』は典座の仕事の重要性を説くにとどまらず、典座の職を通して「食」の大切さ、命の尊さ、そして仏道修行のあり方、人間の生き方を説いている仏道修行における総合的な内容を含む著作であるといえる。

4. 『典座教訓』の仏教保育への展開

『典座教訓』の仏教保育への展開、実践についての具体的な例として、御幸南保育所（社会福祉法人白梅会）の「所長だより」（二〇一四年十一月十八日号）の中で、『典座教訓』を引用し、食の大切さ、命

の大切さ、感謝の心を育むことを目的に「おたより」を発行し、「食育」の重要性を説いている。¹³⁾

また、「曹洞宗保育連合会」主催の食育講演会（二〇〇九年七月三十日 於永平寺）が行われ、永福寺住職、精進料理研究家の高梨尚之師を迎え、「道元禅師の食育―命を育む精進料理―」とのテーマで講演がなされている。この講演会への参加者は、「曹洞宗保育連合会」に加盟している幼稚園、保育所に勤務している理事長、園長、幼稚園教諭、保育士である。その講演内容は、『典座教訓』を基に「食育」の重要性についてであり、講師の高梨尚之師の永平寺での典座職の経験から、教育、保育の現場において、「食」のあり方について学ぶ必要があることが強調されているものである。¹⁴⁾

また、福祉施設においても、「シンポジウム」施設における食について（社会福祉法人全国社会福祉協議会、日本福祉施設士会主催北海道ブロックセミナー 二〇〇九年六月十八日～十九日）における講演会において、「明日の可能性は、今日の食事にあり―食はヌチグスイ（命薬）である―」と題して、日本栄養士会元副会長古水扶美子氏による講演の中で『典座教訓』を題材に「三心」（「喜心」・「老心」・「大心」）の教えを引用し、給食者の心得について講演がなされている。¹⁵⁾ このように今日、保育、福祉の現場において、道元禅師の『典座教訓』の教えが、数多く引用され、「食育」の重要性が度々強調され、展開されているのが現状である。

そこで本論においては、道元禅師の著書である『典座教訓』の内容を詳細に検討することによって、仏教保育の現場で具体的にどのような展開できるかについて考察を進めるものである。その際、仏教保育の実践は、仏教の各宗派によって、その保育目標も異なり、そして日々

の指導内容もそれぞれ異なる。そこで各宗派を超えた活動をしている公益社団法人日本仏教保育協会が定義している「仏教保育綱領」に基づいて考察を進めることにする。この日本仏教保育協会の基本方針は、「生命尊重の保育の確立と心の教育の推進」であり、この基本方針に基づいて「仏教保育綱領」が作成されている。「仏教保育綱領」の三項目とは、

① 慈心不殺 じしんふせつ 生命尊重の保育を行おう 〈明るく〉

② 仏道成就 ぶつどうじゆじゆ 正しきを見てたえず進む保育を行おう 〈正しく〉

③ 正業精進 しやうぎやうしやうじん よき社会人をつくる保育を行おう 〈仲よく〉

以上の三項目である。

そこで道元禅師の『典座教訓』の教えがどのようにこの「仏教保育綱領」に対応し、展開することができるかを考察することを本論の目的とする。具体的には、「仏教保育綱領」の三項目に従って『典座教訓』の教えの内容を詳細に分類していくものである。

① 「慈心不殺」 じしんふせつ

「慈心不殺」は、「生命尊重の保育を行おう〈明るく〉」と定義している。仏教において生命の尊重は、人間だけでなく全ての生き物の生命の大切さを表し、さらに生き物のみならず、全てのものの大切さを説くものである。全てのものに対して慈悲の心を持って接していく姿勢を養うことが大切である。また、併せて動植物の命をいただくことにより、生命を維持することのできる道理を理解し、「いただきます」の深義を理解することが大切である。

①-1 《食材の大切さを再認識する》

【10】 打得了。護_レ惜_二之_一如_二眼晴保寧勇禪師曰。護_二惜眼晴常住物_一。

(訳) 材料を決めたならば、これらの材料を大切にしなければならぬ。保寧山仁勇禪師は、「眼晴（人間の眼）そのものであるお寺の全てのものを大切にしない」と述べている。

【11】 敬_二重_一之如_二御饌草料_一。

(訳) これらの材料を敬い大切にすることは、高貴な方が召し上げる食事のように大切にすることが必要である。

【12】 生物熟物。俱存_二此意_一。

(訳) 生ものに対しても、煮たものに対しても同様に心がけることである。

【179】 然乃看_レ水看_レ穀。皆可_レ存_二養_レ子之慈懇_一者歟。

(訳) このようなわけで、典座が水加減を点検し、穀物を扱う時も全て、親が子を思い、養う時のような慈しみ、愛する心を持って典座職をつとめるべきである。

①-2 《命の大切さを知り、食材を無駄にしない》

【26】 取_二其淘米白水_一。亦不_二虚棄_一。古來置_二漉白水囊_一。辨_二粥米水_一。

(訳) 米をといだ白水でも、米も一緒に捨ててしまうようなことがあつてはならない。昔から白水を濾す袋を備え、一粒の米でも無駄にしなかった。次に粥のための米と水の分量を量る。

【37】 如_レ浸_二齋米_一。典座莫_レ離_二水架邊_一。明眼親見。不_レ費_二一粒_一。

如_レ法淘汰。

(訳) 昼食の米を水につける場合には、典座は流しの付近を離れ

てはならない。そして明らかな眼を持ってしっかりと見て、米一粒も無駄にしてはならない。理にかなった方法で米をとぐ。

【39】 古云。蒸_レ飯。鍋頭爲_二自頭_一。淘_レ米。知_二水是身命_一。

(訳) 昔の人は、「ご飯を炊く際は、鍋を自分自身と思い、米をとぐときには、水を命そのものと考える」と述べている。

①-3 《物（道具類）の大切さを再認識する》

【29】 俵杓等類。一切物色。一等打併。眞心鑑_レ物。輕手取放。

(訳) 菜箸や杓子などの道具類も、全て心をこめて丁寧に片づけ、心をこめて点検して、丁寧に扱うようにする。

以上のように、生き物の命の大切さ、ものの大切さを説いているものである。即ち、あらゆる存在を命あるものとして尊重する心を育てていくことの大切さを説いている。保育の現場において、生き物の命の大切さ、命を「いただく」ことの深義を理解し、そしてものの大切さを子どもたちに伝えていくことが必要であり、仏教保育においても、その保育の中心となる教えである。

② 「仏道成就」
（ぶつどうじゆうじゆ）

「仏道成就」は、「正しきを見てたえず歩む保育を行おう（正しく）」と定義している。仏の教えを拠り所として、心の支えとして常に真実を見極める目を持って、絶えず前に進むことの大切さを説くもので、そこに将来社会を支える子ども達の心の基礎を培う必要がある。

②-1 《凡夫の見識でものを見ない》

【44】 古時無_レ飯頭羹頭等_一。典座一管。

(訳) 昔は飯頭や羹頭の係は無く、食事の支度は全て典座が一人で行っていた。

【45】 凡調_二辨物色_一。莫以凡眼觀。莫以凡情念。

(訳) 全ての食事を調理し、支度する際には、凡夫の見識でものを見てはならない。また、凡夫の心で物事を考えてはならない。

【46】 拈_一莖艸_一。建_二寶王刹_一。入_二微塵轉_二大法輪_一。

(訳) 一本の草を手取るような仕事であっても、そこに仏道の実現の場(大伽藍)を現わし、一微塵ほどの狭い場所においても、偉大な仏法を説き続けることが大切である。

【47】 所謂縱作_二莆菜羹_一之時。不_レ可_レ生_二嫌厭輕忽之心_一。縱作_二頭乳羹_一之時。不_レ可_レ生_二喜躍歡悅之心_一。既無_二耽著_一。何有_二惡意_一。然則雖_レ向_レ麁全無_二怠慢_一。雖_レ逢_レ細彌有_二精進_一。

(訳) たとえ粗末な野菜汁などの料理を作る時でも、嫌な心を起こしたり、粗末に扱ったりする心を起こしてはならない。また、たとえ上等な料理を作る時でも、うかれたり、はざんだりする心を起こしてはならない。もうすでにどのようなものにも執着する心が無くなったならば、どうしてものを嫌がつたりする心が起きようか。そういうわけで、粗末なものを扱っても、怠り、怠ける心を起こすことなく、上等なものを扱っても、さらに心をこめて料理を作るように心がけることである。

②-2 《心を込めた仏道修行》

【48】 切莫遂_レ物而變_レ心也。順_レ人而改_レ詞。是非_二道人_一也。

(訳) 物の良し悪しによって自らの心を変えたり、人によって言葉づかいを変えてはならない。それは、仏道修行をしている人の行いではない。

【49】 勵_レ志至_レ心。庶幾淨潔勝_二于古人_一。審細超_二于先老_一。

(訳) 典座は自らの心をはげまし、心をこめて、その職責を果たし、昔の典座よりもっと勝れた食事を修行僧に供養し、先人達よりもより細やかな心で、その仕事にあたって欲しいものである。

【50】 其運心道用爲_レ體者。古先縱得_二三錢_一而作_二莆菜羹_一。今吾同得_二三錢_一而作_二頭乳羹_一。

(訳) 典座が心をこめて仏道を求める心は、昔のすぐれた先人が、例えば三錢のお金で粗末な野菜汁などの料理を作ったとしても、今、私は同じ三錢のお金で上等な料理を作ってみせることである。

【51】 此事難_レ爲也。所以者何。今古殊異。天地懸隔。豈得_レ齋_レ肩者哉。

(訳) このことは大変難しいことである。今と昔では、大きく異なり、天と地の隔たりがある。どうして今の人と昔の人と肩を並べることができようか。

【52】 然而審細辨_二肯之_一時。下_二視古人_一之理。定有_レ之也。

(訳) しかし審細によく考えてみるに、古人を越えて下眼に見ることもできるという道理も必ずそこにはある。

【53】 此理必然。猶未_二明了_一。卒由思議紛飛_レ。如_二其野馬_一。情念奔馳_レ。同_二於林猿_一也。

【54】 若使_レ彼猿馬。一旦退步返照。自然打成一片。是及被_レ物之所_二轉_一。能轉_二其物_一之手段也。

(訳) このような道理があるのに、その道理が理解できなければ、雑念が野を駆ける馬のように激しく暴れ回り、また、妄想が林の中を自由に走り回ることになる。

(訳) もしその林の中を走り回る猿や、野を駆ける馬のように、外に向いた妄想を内に向けて、自らを振り返るならば、自然にものと心が一つになっていく。これが即ち、心が外の環境の影響を受けても、心を乱されたりすることがなく、よく外のを動かしていく手段である。

【55】 如此調和淨潔。勿_レ失_二眼兩眼_一。

(訳) このように、心を調べ、心と外の環境が調和し、物事の道理を見極める心を清らかにし、諸法と実相が一体であるというすぐれたものの見方を失わないようにしなければならぬ。

【56】 拈_二一莖菜_一。作_二丈六身_一。請_二丈六身_一作_二一莖菜_一。

(訳) 一本の野菜を手にし、一丈六尺の仏の身として大切に用い、一丈六尺の仏の身を一本の野菜に込めて、これを大切にしていこうことである。

【57】 神通及變化。佛事及利生者也。

(訳) これが仏の神通力というものであり、典座の自由自在なほたらきでもあり、仏道修行であり、多くの人々を利益することでもある。

②-3 《「文字」の大切さ、「文字」の本当の意義》

【103】 山僧後看_二雪竇有_二頌示_一。僧云一字七字三三三。萬像窮來不_レ爲_レ據。夜深月白下_二滄溟_一。搜_レ得驪珠有_二多許_一。

(訳) 私は、後にこの文字について、雪竇重顕禪師が修行僧に向けて書いた詩文を読むことがあった。それは、「一字や七字や、三字や五字でものごとを言い表すが、この世の中のものにゆるものの本質を極めてみれば、全ての拠り所とはならない。夜も更けて、月はこうこうと輝き、その光は大海に降り注ぐように、探し求めていた龍の顎のすばらしい玉も、手に入れてみればなんと一面にいたるところに見られるではないか」と言うものである。

【106】 後來兄弟。從_二這頭_一看_二了那頭_一。從_二那頭_一看_二了這頭_一。作_二偈功夫_一。便_レ了_二得文字上_二味禪_一去也。

(訳) これから仏道を学ぶ者は、こちらからあちらを見、あちらからこちらを見ると言うように、丁寧に見て学び修行するならば、「文字」の上にも一つの禪の純粹な教えがあることがわかるであろう。

②-4 《差別の心で見ない》

【117】 所謂調_二醍醐味_一。未_二必爲_レ上_一。調_二蒲菜羹_一。未_二必爲_レ下_一。捧_二蒲菜_一擇_二蒲菜_一之時。眞心。誠心。淨潔心。可_レ準_二醍醐味_一。

(訳) よく言われるように醍醐味というご馳走を作る時も、上等とは思わず、粗末な野菜汁を作る時も、粗末なものだとは思わず、野菜を扱う際も、まごころ、誠実な心、清らかな心で醍醐味を作る時のような心で作らなければならない。

【119】況復長道芽。養聖胎之事。醍醐與蒲菜。一如無二如也。

(訳) ましてや悟りを求める心を育て、仏の智慧を宿すこの体を養うことにおいては、上等なものであっても、粗末なものであっても同じであり、どうして別々なものであろうか。

【122】又不_レ可_レ見衆僧之得失。不_レ可_レ顧衆僧之老少。

(訳) 修行僧の良し悪しを見てはならない。また、修行僧の年の差を問題にしてはならない。

【124】耆年晚進。其形雖異。有智愚朦。僧宗是同。

(訳) 老人と若者、智慧のあるものと愚かな者は、形の上では異なるが、僧宝(三宝の一つ)の上では同じく尊い存在である。

【127】若有_二一切是非莫_レ管之志氣_一。那非_下直趣_二無上菩提_一之道業_上耶。

(訳) もし、「全てのは非、得失、老少、凡聖という区別を立てない」という意気込みがあつたなら、この典座職がそのまま悟りの世界に入るための修行でないことがあるうか。

②-5 《「三心」の教え・「喜心」》

【159】凡諸知事頭首。及_レ當_レ職作_レ事作_レ務之時節。可_レ保_二持喜心_一。老心。大心_一者也。

(訳) およそ禪寺の役職である知事や頭首は、その職にあたって、その職をつとめる時は、「喜心」、「老心」、「大心」の心構えを持つべきである。

【160】所謂喜心者。喜悅心也。

(訳) いわゆる「喜心」とは、喜ぶ心のことである。

【168】今生既作_レ之。可_レ悦之生也。可_レ悦之身也。曠大劫之良縁也。不_レ可_レ朽之功德也。

(訳) 今の自分は人間界に生まれて三宝に供養する食事を作っている。まことに喜ぶべき身の上であり、喜ぶべき生涯でもある。まことに永遠に尽きない良いめぐり合わせであり、朽ちることのない果報である。

【171】如_レ此觀達之心。乃喜心也。

(訳) この様に、深い道理を見極めることが、即ち「喜心」である。
【172】誠夫縱作_二轉輪聖王之身_一。非_レ作_下供_二養三寶_一之食_上者。終其無_レ益。唯是水沫泡焰之質也。

(訳) たとえ世界を治める転輪聖王の身に生まれたとしても、三宝に供養する食事を作ることなければ、何の益もない。それは水の泡や炎のようなはかない境遇である。

②-6 《「三心」の教え・「老心」》

【173】所謂老心者。父母心也。譬若_二父母念_二於一子_一。存_二念三寶_一。如_レ念_二一子_一也。

(訳) いわゆる「老心」とは、父母の心、例えば父母が我が子に思う心である。典座は、三宝に供養する食事を作るといふ思いを常に持つて修行僧に食事を供養することである。

【174】貧者窮者。強愛_二育一子_一。其志如何。外人不_レ識。作_レ父作_レ母方識_レ之也。

(訳) 貧しい者も、困っている者も、親は一心に我が子を愛し育てるものである。その親の心とはどのようなものか。それは他の人にはわからないが、父となり、母となつて初めて知ることである。

【175】不_レ顧_二自身之貧富_一。偏念_二吾子之長大_一也。

(訳) 自分自身が貧しいとか、裕福であるとかにかかわらず、ひたすら我が子の成長のみを願うものである。

【176】不_レ顧_二自寒_一。不_レ顧_二自熱_一。蔭_二子覆_レ子。

(訳) 親は自らが寒いことも、熱いことも顧みず、子どもを暑さ、寒さからかばい守っている。

【177】以爲親念切切之至。

(訳) これは親が子を思う深い心である。

②・7 《「三心」の教え・「大心」》

【182】所謂大心者。大_二山于其心_一。大海_二于其心_一。無_レ偏無_レ黨心也。

(訳) いわゆる「大心」とは、大山のように、高く、大きな心であり、大海のように深く、広い心である。一方に偏ったり、固執することのない心である。

【185】於_二是一節_一。可_レ書_二大之字_一也。可_レ知_二大之字_一也。可_レ學_二大之字_一也。

(訳) このように何ものにも迷わされたり、心動かされたりしないという心で、大の字を書き、大の字を知り、大の字を学ぶべきである。

【189】應_レ知向來大善知識。俱是百草頭上。學_二大字_一來。今乃自在作_二大聲_一。說_二大義_一。了_二大事_一。接_二大人_一。成_二就者箇一段大事因緣_一者也。

(訳) このように、昔からすぐれた禅の指導者は、あらゆる事柄において、大の字を学び、今も自在に大いなる声を発し、偉大な教えを説き続け、禅の根本を明らかにし、りっぱな

人を指導し、仏道の真実を極めた人である。

以上のように「仏道成就」の項目においては、常に真実を見極める目を持って絶えず前に進むことが大切であり、保育の現場における保育者としての立場が示されている。

第一には、凡夫の見識、即ち迷いの心で物事を見て、考えてはならないことを説き、保育の現場においても真実を見極める目を持って日々の保育にあたることの大切さに通じる。

第二には、心をこめた仏道修行を行うことを説くもので、ものの良し悪しによって心を変えたり、人によって言葉遣いを変えたりしてはいけなさと戒めている。そして心をこめて細やかな心で、ものごとの道理を見極める目を持つてその仕事にあたるのが大切であり、それが多くの人々を利益するものであることを説いている。保育の現場においても保育者の子どもに対する見方も同様であり、正しい見方で、細やかな心で、子どものことを第一に考え、平常心を持つてその仕事にあたるのが大切であることに通じる。

第三には「文字」の大切さ、「文字」の本当の意義を説くもので、「文字」の上にも禅の純粹な教えがあり、それは歴代の祖師達によって伝承されており、「文字」として記録されてきており、その中に仏道修行の真髓が説かれているもので、住職に就く者においても典座職と同様な心構えをもつてのぞむ必要があると説かれている。このことは保育の現場においても同様であり、「文字」の中に説かれている深義を理解し、先人の知恵、専門知識を丁寧に見て学ぶ姿勢の大切さに通じる。

第四には、差別の心で見ないことを説くもので、上等な料理を作る時も、粗末な料理を作る時においても、真心をこめて調理を行うことが大切である。また、修行僧に対しても同様に、老人と若者、智慧の

ある者と愚かな者など、その良し悪しによって差別の心で見てはならないことを説くものである。これは保育の現場においても、日々の日常生活の中においても同様に、差別の心を持って子どもたち、人々を見ることなく、常に平等な目で見ることの大切さに通じる。

第五には、「三心」の中の「喜心」について説かれているもので、「喜心」とは、喜ぶ心のことであり、食事を供養する大切な役割を担うことを喜び、喜んでその任にあたることを説くものである。保育の現場においても、この「喜心」を持ち、保育の現場に勤めることができることに感謝し、常に子どもたちに接していく姿勢の大切さを説いている。この「喜心」を常に持ち続けていくことによって、保育者としてのやりがい、そして、すばらしい保育の展開に通じる。

第六には、「三心」の中の「老心」について説かれているもので、「老心」とは、父母の心であり、父母が子を思う心であり、父母が我が子を大切に思う心である。典座が食事を供養する時も、この「老心」を常に持って、その供養にあたるのが大切であると説かれている。保育の現場においても、この「老心」を常に持って日々の保育にあたるのが大切である。父母が我が子を慈しむように、保育者も同様に全ての子どもに接していくことが必要である。また、この「老心」で説かれるように、父母の子どもへの愛情を学ぶことによって、それぞれの子どもの保護者の思いを知り、子どものみならず、保護者の理解、そして保護者への対応にも通じる。

第七には、「三心」の中の「大心」について説かれているもので、「大心」とは、大山のように高く大きな心であり、偏りの心を持たず、大きく、広い心である。保育の現場においても「大心」の広く、大きな心を持って日々の保育にあたり、一方に偏ることのない心で、常に子

どもに接していく姿勢の大切さに通じる。

③ 「正業精進」 しやうぎやうしやうじん

「正業精進」は、「よき社会人をつくる保育を行おう（仲よく）」と定義している。私たちは自利、利他の行いで相互に支えあって社会の中で生きている。仏教では自らが生きることが、他の人のために生きることではなければならず、自利、利他一如の関係の中で生活することが大切であると説く。保育の現場においても保育者は、自らの向上のために努力をし、それがそのまま子どもたちのためになっていくことである。保育者自らが自らを高めていこうとする努力を怠らず、常に向上できるように努めることが必要である。そして将来社会を支えていく子どもたちをより良い社会人になるために導いていくことを目的としているものである。

③-1 《最善、最良の供養をする》

【6】 禪苑清規云。須運道心「隨時改變令大衆受用安樂」。

（訳）『禪苑清規』に「食事を供養するには必ず仏道修行の心を持つて、季節に従って食事に変化を付けて、修行僧達が気持ち良く食べられ、身も心も安楽になるように心がけなければならぬ」と述べられている。

③-2 《他人任せにせず、自ら心をこめて行ふ》

【17】 淘米調菜等。自手親見。精勤誠心而作。

（訳）お米をといだり、おかずを調えたりすることは、典座は自ら手を下し、よく気を配り、心をこめて行ふことである。

【18】不_レ可_三一念疎怠緩慢。一事管看。一事不_二管看_一。

(訳) 一瞬たりともおろそかにしたり、投げやりになったり、一つのことはよく注意し、気をつけるが、他の一つのことは注意を怠ったりするようなことがあつてはならない。

【19】功德海中。一滴也莫_レ讓。善根山上。一塵亦可_レ積歟。

(訳) 典座の仕事の大切さと、その功德は、大海のように広く深い功德を積むことであり、この大海も一滴が集まってできているのであるから、ほんの僅かなことでも他人まかせにしてはならない。また、山のように高い善根を積み重ねることにおいても、大山はひとつまみほどの土が積もって成り立ったものであるように、小さなことでも自分で積み重ねなければならぬ。

【20】禪苑清規云。六味不_レ精。三德不_レ給。非_三典座所_二以奉_レ衆也。

(訳) 『禪苑清規』に「苦・酸・甘・辛・鹹・淡の六種の味わいが調つておらず、また、輕軟(あつさりとして軟らかい)・淨潔(きれいでけがれない)・如法作(法にかなって丁寧調理されている)」という三徳が備わっていなければ、修行僧に食事を供養したことにはならない」と述べられている。

【21】先看_レ米便看_レ砂。先看_レ砂便看_レ米。審細看來看去。不_レ可_二放心_一。自然三徳圓滿六味具備。

(訳) まずお米をとこうしたら、砂が混じっていないかをよく見、そして砂を捨てる際には米が混じっていないかをよく見る。詳細に注意してよく見ることが大切である。そうすれば自ずと三徳が備わり、六味が備わってくる。

【22】雪峰在_二洞山_一作_二典座_一。一日、淘_レ米次。洞山問。淘_レ砂去_レ米。

淘_レ米去_レ砂。峰云。砂米一時去。洞山云。大衆喫_二箇什麼_一。峰覆_二却盆_一。山云。子佗後別見_レ人去在。

(訳) 雪峰義存和尚が洞山良介禪師のもとで典座職をつとめる。ある日、雪峰義存和尚が米をといでいる時に、洞山良介禪師が問うた。「砂をといで米を取り除くのか、それとも米をといで砂を取り除くのか」と。すると雪峰義存和尚は「砂も米も同時に取り除きます」と。洞山良介禪師がさらに尋ねた。「それでは修行僧達は何を食べるのか」と。これを聞いて雪峰義存和尚は、米の入っている盆をひっくり返してしまった。洞山良介禪師はその様子を見て、「あなたはどうか、他の指導者の下で指導を受けることになるだろう」と言った。

【23】上古有道之高士。自手精至。修_レ之如_レ此。後來晚進。可_レ怠_二慢之歟_一。

(訳) 昔から仏道修行を志すすぐれた高僧達は、自ら心をこめてこの典座職をつとめたことはこの通りである。後に修行しようとする人は、これを怠り、怠けることがあつてよいはずがない。

③-3 《不平、不満を口にせず、心をこめて仏道修行に励む》

【33】隨_二庫司_一所_二打得_一物料。不_レ論多少_一。不_レ管_二麁細_一。唯是精誠辨備而已。切忌。作_レ色口說_二料物多少_一。

(訳) 庫裡の役職から受け取った材料について、量の多い少ない、質の良し悪しを言つてはならない。ただひたすら心をこめて調理することである。顔色を変えて材料の多少等を口に

するようなことは慎まなければならない。

【34】 竟日通夜。物來在_レ心。心歸_レ在物。一等與_レ佗精勤辨道。

(訳) 典座は朝から晩まで食事の材料が常に心の中にあり、また、心を常に食事の材料に注ぎ、物と心が一体となり、心をこめて仏道修行にはげむことである。

③―4 《心のこもった食事、「四事」(「飲食」・「衣服」・「臥具」・「医薬」)の供養》

【110】 禪苑清規云。二時粥飯。理合_レ精豐。四事供須_レ無_レ令_レ闕少。世尊_二千年遺恩。蓋_二覆兒孫。白毫光一分功德。受用不_レ盡。

(訳) 『禪苑清規』に次のように言っている。「粥と昼食を準備するには、十分に心のこもった豊かな内容でなければならぬ。修行生活に必要な「飲食」、「衣服」、「臥具」、「医薬」の四事の供養も不足を感じさせるようなことはあつてはならない。お釈迦様が百歳の寿命を二十年縮めて、後世の人々のために残してくれた恵みは、子孫を守ってくれている。そしてお釈迦様の眉間の白毫の光の恩恵も私達には用い、尽きることがない。」

③―5 《食事供養の心構え》

【114】 調_二辨供養物色_一之術。不_レ論_二物細_一。不_レ論_二物麁_一。深生_二眞實心_一。敬重_二心_一爲_二詮要_一。

(訳) 修行僧に供養する食事を調える際の心構えは、材料が上等であるか、粗末であるかを問題にするのではなく、深く心をこめてその職に当たり、敬う心を持つことが大切である。

【115】 不_レ見麼。漿水一鉢。也供_二十號_一。自得_二老婆生前之妙功德_一。

菴羅半果。也捨_二一寺_一。能萌_二育王最後之大善根_一。授_二記前感_一大果。

(訳) 次の様な話をご存知でしょうか。ある老婆がお釈迦様に「ご供養するものが他に無く、わずか一杯の米のとき汁を供養したところ、生前中にこの上もない福德を受けました。また、阿育王は、臨終の時に、手元の半分のマンゴーの実を鶏園寺に供養した時に、お釈迦様より成仏の約束を得、大きな果報を得たというものです。

【116】 雖_二佛之縁_一。多_レ虚不_レ如_レ少_レ實。是人之行也。

(訳) 仏のためにする供養であつても、心のこもっていない多くのものを供養するよりも、少量でも心のこもったものを供養するほうが勝る。これがすぐれた人の行いである。

③―6 《粗末な野菜汁によつて人々を導く》

【121】 可_レ想_二蒲菜能養_一聖胎。能長_二道芽_一。不_レ可_レ爲_レ賤。不_レ可_レ爲_レ輕。人天之導師。可_レ爲_二蒲菜之化益_一者也。

(訳) 粗末な野菜汁が修行僧の尊い身体を養い、悟りを求める心をよく育ててくれることをよく考えることが必要である。粗末なものを食べても、卑しんだり、軽んじてはいけない。仏道を説く導師は、この粗末な野菜汁によつて食事の尊さを説き、人々を導き、修行のために役立たせるべきである。

③―7 《すぐれた指導者に会うことの大切さ》

【142】 可_レ憐可_レ悲。無道心之人。未_二會遇_一見有道德之輩。雖_二入_二寶

山^レ兮。空手而歸。雖^レ到^二寶海^一兮。空身而還。

(訳) このように仏道修行の志を持たない人が、未だにすぐれた指導者に会うことがなかったとすれば、それは情けなく、悲しむべきことである。それはまるで宝の山に入っても、何も手に入れずに帰ったり、宝の海に入ったとしても、何も手に入れずに帰るようなものである。

【143】應^レ知雖^二佗未^一會發心^一兮。若見^二一本分人^一。則行^二得其道^一。

(訳) 仏道修行を志す心を発心していなくても、一人のすぐれた指導者に会えば、教えを受けることができたならば、真実の仏道を修することができる。

【144】雖^レ未^レ見^二一本分人^一兮。若是深發心者。則行^二膺其道^一。

(訳) また、すぐれた指導者に会うことができなくても、深く心に仏道を求める心を起こせば、必ず仏道を成就することができるということを知るべきである。

【145】如^レ見^二大宋國諸山^一。諸寺^一。知事頭首。居^レ職之族。雖^レ爲^二二年之精勤^一。各存^二三般之住持^一。與^レ時營^レ之。競^レ緣勵^レ之。

(訳) 私が見てきた中国の宋の諸寺院について見るならば、知事や頭首という役職についている人々は、一年間の任期で、それぞれの役職にあたっているが、各自が三通りの住職と同じ心構えで、それぞれの役職の任にあっている。例えば、典座職なら修行僧を供養するように、それぞれの職についたことを良い機会のめぐり合わせとして喜び、競って仕事に励んでいる。

【147】已如利^二他兼豐^一自利^一。一興叢席^一新高格^一。齋^レ肩競^レ頭^レ繼^レ踵重^レ蹤。

(訳) 三通りの心構えとは、一つには、他の人のために尽くすことにより、自分自身を豊かにする。二つには、修行道場をいっそう盛んにし、高尚な風格を高める。三つには、過去のすぐれた僧達に肩を並べ、その足跡を受け継ぎ、その業績を受け継いでいく。以上の三通りである。

【148】於^レ是應^レ詳^下。有^二見^レ自如^レ佗之癡人^一。有^中顧^レ佗如^レ自之君子^上。

(訳) そのようなわけで、自分の事を、他人事のようになおざりにしている愚か者がいれば、他人の事を自分の事のように考えているすぐれた人もいることをしっかりと見極めることが必要である。

【150】須^レ知^下未^レ見^レ知識^一。被^中人情奪^上。

(訳) 真の指導者にめぐり会うことができなかったならば、欲望に迷わされる心に引きずられてしまう事を知るべきである。

【153】嘗^レ觀當^レ職前來有道。其掌其德自符^一。

(訳) これまで典座の職をつとめたすぐれた先人達を見ると、その仕事と人柄が一致しているという事を理解しておく必要がある。

以上のように典座の食事供養を通して、その心構えや人間の生き方、保育者の子どもを育てていく方法など具体的な教えが説かれている。

第一には、『禪苑清規』¹⁶を引用し、典座が食事を供養する場合に、春夏秋冬それぞれの季節に折々の食材を用いて食事に変化をつけて、修行僧のことを第一に考え、最良、最善の供養をすることが大切であると説いている。保育の現場においても、主役である子どもを第一に考え、尊び、それぞれの季節に応じた食事の提供、そし

て行事を通して子どもの健全な育成を図り、子どものために最良、最善の保育につとめることに通じる。

第二には、典座の仕事は他人任せにするのではなく、自ら手を下し、よく気を配り、心をこめて行うことの大切さを説いている。保育の現場において、特に保育者は命を預かる仕事であり、その重要性は尚更である。自らの仕事に対して誇りと責任を持つてのぞみ、心をこめて行うことが大切であるということに通じる。

第三には、典座は材料の多少、良し悪しにとらわれたり、不平を口に出したりすることを慎み、常に食事の供養のことを念頭に置き、心をこめて仏道修行に励むことが大切であることを説いている。保育の現場においても、子どもや保護者、同僚保育者、施設設備などに対する不平、不満を慎み、心をこめて日々の保育に専念することが大切であるということに通じる。

第四には、『禅苑清規』を引用し、食事の供養は心のこもった豊かな内容で、「四事」(「飲食」・「衣服」・「臥具」・「医薬」)の供養も十分である必要があると説かれている。保育の現場においても、心のこもった豊かな内容の保育が大切である。同時に、子ども、保育者、園舎などの保育環境の整備が重要であり、常に保育環境を整えて保育のぞむことの大切さに通じる。

第五には、典座の食事供養の心構えとして、材料が上とか粗末かを問題にせず、敬う心で心をこめてその職にあたることが説かれている。保育の現場においても、子ども、教材などに対して、常に敬い、大切に扱う心を持って日々の保育にあたり、心のこもった保育を行うことに通じる。

第六には、仏の道を説く導師は、粗末な野菜汁によって食事の尊さ

を説き、人々を仏道に導くと説かれている。保育の現場においても、さまざまな保育教材、保育の機会に最も有効な保育が展開できるように、常に努力をしていくことの大切さに通じる。

第七には、すぐれた指導者に巡り会うことによって真実の仏道を修し、成就することができると説かれている。その際、次の三つの心構えを念頭に置いて典座の職責を果たすことが大切であると説かれている。三つの心構えとは、次の通りである。

一、他の人のために尽くすことにより、自分自身を豊かにする。

二、修行道場をいつそう盛んにし、高尚な風格を高める。

三、過去のすぐれた僧達に肩を並べ、その足跡を受け継ぎ、その業績を受け継いでいく。

そして過去の典座職をつとめた祖師達は、その仕事と人柄とが一致していると説かれている。保育の現場においても、同様にすぐれた指導者(保育者)に巡り会うことが大切である。そのすぐれた指導者(保育者)の備えるべき心構えとは、『典座教訓』に準じて次のように理解することができる。

一、他人のために尽くすことにより、自分自身を豊かにすることである。常に子どものことを第一に考えて接していくことにより、自分自身も豊かになっていくことである。

二、各園を一層盛んにし、教育、保育目標を達成するようにつとめることである。

三、過去のすぐれた指導者(保育者)の教えを受け継ぎ、より良い保育ができるように、常に日々精進していくことが大切である。

これらの三つの心構えを備えることによって、すぐれた指導者(保育者)をめざし、子どもたちが将来仲が良く、幸せな社会を築き上げ

ることできるように育てることに通じる。

以上のように道元禪師の『典座教訓』の教えが日本仏教保育協会の「仏教保育綱領」の三項目に、それぞれ対応し、仏教保育の指標となる教えの内容であり、この『典座教訓』の教えは保育の現場において展開することのできる教えである。

5. まとめ

上述のように、道元禪師の説く『典座教訓』の教えが、具体的に仏教保育の現場に展開することができるかを、日本仏教保育協会の「仏教保育綱領」の三項目に基づいて詳細に考察してきた。①「慈心不殺」に関するものとして三項目、②「仏道成就」に関するものとして七項目、③「正業精進」に関するものとして七項目と、合計十七項目を見出すことができた。この『典座教訓』は、典座の仕事の重要性を強調し、禪宗寺院における修行生活を細かく、厳格に規定している内容である。しかし典座の仕事の重要性を説くにとどまらず、典座の職を通して「食」の大切さ、命の尊さ、そして仏道修行のあり方、人間の生き方を説いているという総合的な内容を含むものである。それ故に、この『典座教訓』を詳細に考察することによって、道元禪師が説く禪の教えが仏教保育の現場に十分に展開できる内容であるといえる。また、保育の現場においては、その主導的な立場に立つ保育者の力量が、子どもの成長を大きく左右する。^① それ故に、この仏教保育の現場においては、各保育者の仏教理解が大切な要素となる。それは単に個々の仏教行事を実践するだけではなく、仏教教理の理解のもとに行事が展開されることが望ましいといえる。そこで今回考察してきた道元禪師の『典座教訓』に説かれている教えを、具体的に保育の現場に展開

し、子ども達を保育していくことがとても有益であるといえることができる。前記したように、仏教保育とは「仏教的人格の完成をめざして、仏教の教えを通して、乳幼児の身心の発達を促し、個々の本質を探究し、全ての生き物の命の尊厳を尊ぶ心を育てる保育」と捉える。それは、ただ単に一般の保育に仏教的な要素を持ち込むというものではなく、すぐれた仏の教えが子どもの体と心に浸透し、保育全般に仏教保育の方針が貫かれていることが必要である。そして仏教保育を通じて子どもの身心の望ましい発達を促し、仏教的人格の完成を目指すものでなければならぬ。そして日々の保育を通して個々の人間の本質を探究し、生命の尊厳の心を育てていく仏教保育の実践が大切であるといえる。

また、この道元禪師の『典座教訓』に説かれる「三心」（「喜心」・「老心」・「大心」）の教えは、仏教保育のみならず一般の保育においても常に念頭に置いて日々の保育にあたるのが大切である。「喜心」は感謝の心を持って、喜んで保育の仕事にあたる。「老心」は父母が子どもを慈しむように子どもに接する。「大心」は広く、大きな心を持ち、一方に偏ることのない心で子どもに接する、と解することができる。この「三心」を常に心がけ、日々の保育にあたるのが大切であり、一般の保育においても最も大切にしなければならない心構えといえる。また、この道元禪師の『典座教訓』の教えは、私たちの食生活に多くの示唆を与え、時代を超えて、現代においても十分に人々を導く教えである。そしてさまざまな保育の現場においても通じる教えの内容であるといえる。これらの教えを仏教保育の現場に展開し、生かすことによって、将来の社会を支えていく子どもたちを育てていくことが大切であるといえる。

『典座教訓』

觀音導利興聖寶林禪寺比丘道元撰

- 【1】佛家從_レ本有六知事。共爲佛子。同作佛事。
- 【2】就中典座一職是掌衆僧之辨食。
- 【3】禪苑清規云供養衆僧故有典座。
- 【4】從_レ古道心之師僧。發心之高士。充來之職也。蓋猶二色之辨道一歟。
- 【5】若無道心者徒勞辛苦畢竟無益也。
- 【6】禪苑清規云。須運道心隨時改變令大衆受用安樂。
- 【7】昔日瀧山洞山等勤_レ之。其餘諸大祖師。曾經來也。所以不同世俗食廚子。及饌夫等者歟。
- 【8】山僧在宋之時。暇日咨問于前資勤舊等。彼等聊舉見聞。以爲山僧說。此說似者。古來有道之佛祖。所遺之骨隨也。大抵須熟見禪苑清規。然後須聞勤舊子細之說。
- 【9】所謂當職經一日夜。先齋時罷。就都寺監寺等邊。打翌日齋粥之物料。所謂米菜等也。
- 【10】打得了。護惜之。如眼睛保寧勇禪師曰。護惜眼睛常住物。
- 【11】敬重之。如御饌草料。
- 【12】生物熟物。俱存此意。
- 【13】次諸知事。在庫堂商量。明日喫甚味。喫甚菜。設甚粥等。
- 【14】禪苑清規云。如打物料並齋粥味數。竝預先與庫司知事商量。所謂知事者有都寺。監寺。副司。維那。典座。直歲也。
- 【16】味敷議定了。書呈方丈衆寮等嚴淨牌。然後設辨明朝粥。
- 【17】淘米調菜等。自手親見。精勤誠心而作。
- 【18】不_レ可一念疎怠緩慢。一事管看。一事不_レ管看。
- 【19】功德海中。一滴也莫_レ讓。善根山上。一塵亦可_レ積歟。
- 【20】禪苑清規云。六味不_レ精。三德不_レ給。非典座所_レ以奉衆也。
- 【21】先看米便看砂。先看砂便看米。審細看來看去。不_レ可放心。自然三德圓滿六味具備。
- 【22】雪峰在洞山作典座。一日淘米次。洞山問。淘砂去米。淘米去砂。峰云。砂米一時去。洞山云。大衆喫箇什麼。峰覆却盆。山云。子佗後別見人去在。
- 【23】上古有道之高士。自手精至。修之如此。後來晚進。可_レ怠慢之歟。
- 【24】先來云。典座以_レ絆爲道心一矣。如有米砂誤淘去。自手檢點。
- 【25】清規云。造食之時。須親自照顧。自然精潔。
- 【26】取其淘米白水。亦不_レ虛棄。古來置漉白水囊。辨粥米水。納鍋了留心護持。莫_レ使老鼠等觸誤。竝諸色閑人見觸。
- 【28】調粥時菜一次。打併今日齋時所用飯羹等。盤桶並什物調度。精誠淨潔洗濯。
- 【29】桮杓等類。一切物色。一等打併。真心鑑物。輕手取放。
- 【30】然後理會明日齋料。先擇米裏有蟲。綠豆。糠塵。砂石等。精誠擇了。
- 【31】擇米擇菜等時。行者諷經回向竈公。
- 【32】次擇菜羹。物料調辨。
- 【33】隨庫司所_レ打得物料。不_レ論多少。不_レ管龜細。唯是精誠辨備而已。切忌。作色口說料物多少。
- 【34】竟日通夜。物來在_レ心。心歸_レ在物。一等與佗精勤辨道。

【35】三更以前。管明曉事。三更以來。管做粥事。

【36】當日粥了。洗鍋蒸飯調羹。

【37】如浸齋米。典座莫離水架邊。明眼親見。不費一粒。如法淘汰。

【38】納鍋燒火蒸飯。

【39】古云。蒸飯。鍋頭爲自頭。淘米。知水是身命。

【40】蒸了飯。便收飯飯籬裏。及收飯桶。安擡槃上。

【41】調辨菜羹等。應當蒸飯時節。

【42】典座親見飯羹調辨處在。或使行者。或使奴子。或使火客。教調什物。

【43】近來大寺院。有飯頭羹頭。然而典座所使也。

【44】古時無飯頭羹頭等。典座一管。

【45】凡調辨物色。莫以凡眼觀。莫以凡情念。

【46】拈一莖艸。建寶王刹。入一微塵。轉大法輪。

【47】所謂縱作莆菜羹之時。不可生嫌厭輕忽之心。縱作頭乳羹之時。不可生喜躍歡悅之心。既無耽著。何有惡意。然則雖向匱全無怠慢。雖逢細彌有精進。

【48】切莫遂物而變心也。順人而改詞。是非道人也。

【49】勵志至心。庶幾淨潔勝于古人。審細超于先老。

【50】其運心道用爲體者。古先縱得三錢而作莆菜羹。今吾同得三錢而作頭乳羹。

【51】此事難爲也。所以者何。今古殊異。天地懸隔。豈得齋肩者哉。然而審細辨肯之時。下視古人之理。定有之也。

【53】此理必然。猶未明了。卒由思議紛飛兮。如其野馬。情念奔馳兮。同於林猿也。

【54】若使彼猿馬。一旦退步返照。自然打成一片。是及彼物之所轉。能轉其物之手段也。

【55】如此調和淨潔。勿失一眼兩眼。

【56】拈一莖菜。作丈六身。請丈六身。作一莖菜。

【57】神通及變化。佛事及利生者也。

【58】已調。調了已辨。辨得看那邊。安這邊。

【59】鳴鼓鳴鐘。隨衆隨參。朝暮請參。一無虧闕。

【60】却來這裏。直須閉目諦觀堂裏幾員單位。前資勳舊獨寮等幾僧。延壽。安老。寮暇等僧有幾箇人。且過幾板雲水。菴裏多少皮袋。

【61】如此參來參去。如有纖毫疑猜。問他堂司。及諸寮頭首。寮主。寮首座等。

【62】銷來疑。便商量。喫一粒米。添一粒米。分得一粒米。却得兩箇半粒米。三分。四分。一半。兩半。添他兩箇半粒米。便成一箇一粒米。又添九分。剩見幾分。今收九分。見佗幾分。

【63】喫得一粒廬陵米。便見瀉山僧。添得一粒廬陵米。又見水牯牛。水牯牛喫瀉山僧。瀉山僧牧水牯牛。吾量得也未。爾算得也未。

【64】檢來點來。分明分曉。臨機便說。對人即道。且恁功夫。一如二如。二日三日。未可暫忘也。

【65】施主入院。捨財設齋。亦當諸知事一等商量。是叢林舊例也。

【66】回物俵散。同共商量。不得侵權亂職也。

【67】齋粥如法辨了。安置案上。典座搭袈裟。展坐具。先望僧堂。焚香九拜。拜了。及發食也。

【68】

【69】經「一日夜」。調「辨齋粥」。無「虛度」光陰「。

【70】有「實排備」。舉動施爲。自成「聖胎長養之業」。退步纓身。便是大衆安樂之道也。

【71】而今我日本國。佛法名字。聞來已久。然而僧食如「法作之言」。先人不「記」。先德不「教」。況乎僧食九拜之禮。未「夢見」在。國人謂、僧食之事。僧家作食法之事。宛如「禽獸」。食法實可「生」憐實可「生」悲。

【72】如何哉。

【73】山僧在「天童」時。本府用典座充「職」。予因「齋罷」過「東廊」。赴「超然齋」之路次。典座在「佛殿前」晒「苔」。手携「竹杖」。頭無「片笠」。天日熱。地輒熱。汗流徘徊。勵「力晒」苔。稍見「苦辛」。背骨如「弓」。龍眉似「鶴」。

【74】山僧近前。便問「典座法壽」。座云。六十八歲。

【75】山僧云。如何不「使」行者人工「」。座云。佗不「是吾」。

【76】山僧云。老人家如法也。天日且恁熱。如何恁地。座云。更待「何時」。

【77】山僧更休。

【78】步「廊」脚下。潛覺「此職之爲機要」矣。

【79】又嘉定十六年。癸未。五月中。在「慶元舶裏」。倭使頭說話次。有一老僧來。年六十許歲。一直便到「舶裏」。問「和客」討「買倭榼」。

【80】山僧請「他喫」茶。問「佗所在」。便是阿育王山典座也。

【81】佗云。吾是西蜀人也。離「鄉」得「四十年」。今年是六十一歲。向來粗歷「諸方叢林」。先年權住孤雲裏。討「得育王」掛搭。胡亂過。然去年解夏了。充「本寺典座」。明日五日。一供渾無「好喫」。

要「做麵汁」。未「有」榼在。仍特來。討「榼買」。供「養十方雲衲」。

【83】山僧問「佗」。幾時離「彼」。座云。齋了。

【84】山僧云。育王去「這裏」有「多少路」。座云。三十四五里。山僧云。幾時迴「寺裏」去也。座云。如今買「榼」了便行。

【85】山僧云。今日不「期相會」。且在「舶裏」說話。豈非「好結緣」乎。道元供「養典座禪師」。

【86】座云。不「可也」。明日供養。吾若不「管」。便不是了也。

【87】山僧云。寺裏何無「同事者理」會齋粥「乎」。典座一位。不「在」。有「什麼欠闕」。

【88】座云。吾老年掌「此職」。及耄及之辨道也。何以可「讓」佗乎。又來時未「請」一夜宿暇「。

【89】山僧又問「典座」。座尊年。何不坐禪辨道。看「古人話頭」。煩充「典座」。只管作務。有「甚好事」。

【90】座大笑云。外國好人。未「了」得辨道。未「知」得文字在「。山僧問「佗恁地話」。忽然發慚驚心。便問「佗」。如何是文字。如何是辨道。

【92】座云。若不「蹉」過問處「。豈非「其一人」也。

【93】山僧當時不「會」。

【94】座云。若未「了得」。佗時後日。到「育王山」。一番商「量文字道理」去在。

【95】恁地話了。便起「座云」。日晏了忙去。便歸去了也。

【96】同年七月。山僧掛「錫天童」。時彼典座來得相見云。解夏了退「典座」。歸「鄉」去。適聞「兄弟說」老子在「箇裏」。如何不「來相見」。山僧喜踊感激。接「佗說話」之次。說「出前日在「舶裏」文字辨道

之因緣^上。

【97】典座云。學^レ文字者。爲^レ知^レ文字之故也。務^二辨道^一者。要^レ肯^二辨道之故^一也。

【98】山僧問^レ佗。如何是文字。座云。一二三四五。

【99】又問。如何是辨道。座云。遍界不^レ會藏^一。

【100】其餘說話。雖^レ有^二多般^一。今所^レ不^レ錄也。

【101】山僧聊知^二文字^一。了^レ辨道^一。及彼典座之大恩也。

【102】向來一段事。說^二似先師全公^一。公甚隨喜而已。

【103】山僧後看^二雪竇有^二頌示^一僧云一字七字三十五字。萬像窮來不^レ爲^レ據。夜深月白下^二滄溟^一。搜^二得驪珠有^二多許^一。

【104】前年彼典座所^レ云。與^二今日雪竇所^レ示。自相符合。彌知彼典座是真道人也。

【105】然則從來所^レ看之文字。是一二三四五也。今日所^レ看之文字。亦六七八九十也。

【106】後來兄弟。從^二這頭^一看^二了那頭^一。從^二那頭^一看^二了這頭^一。作^二恁功夫^一。便^レ了^二得文字上一味禪^一去也。

【107】若不^レ如是。被^二諸方五味禪之毒^一。排^二辨僧食^一。未^レ能^レ得^二好手^一也。

【108】誠夫當職先聞現證。在^レ眼在^レ耳。有^二文字^一有^二道理^一。可^レ謂^二正的一歟^一。

【109】縱忝^二粥飯頭之名^一。心術亦可^レ同^レ之也。

【110】禪苑清規云。二時粥飯。理合^二精豐^一。四事供須^レ無^レ令^二闕少^一。世尊^二二千年遺恩^一。蓋^二覆兒孫^一。白毫光一分功德。受用不^レ盡。

【111】然則。

【112】但知^レ奉^レ衆。不^レ可^レ憂^レ貧。

【113】若無^二有限之心^一。自有^二無窮之福^一。蓋是供^レ衆住持之心術也。

【114】調^二辨供養物色^一之術。不^レ論^二物細^一。不^レ論^二物麁^一。深生^二眞實心^一。敬重心^一爲^二詮要^一。

【115】不^レ見^レ麼。漿水一鉢。也供^二十號^一。自得^二老婆生前之妙功德^一。菴羅半果。也捨^二一寺^一。能萌^二育王最後之大善根^一。授^二記荊一感^二大果^一。

【116】雖^二佛之緣^一。多^レ虛不^レ如^レ少^レ實。是人之行也。

【117】所謂調^二醍醐味^一。未^レ必爲^レ上。調^二莆菜羹^一。未^レ必爲^レ下。

【118】捧^二莆菜^一擇^二莆菜^一之時。眞心。誠心。淨潔心。可^レ準^二醍醐味^一。所以者何。朝^二宗于佛法清淨大海衆^一之時。不^レ見^二醍醐味^一。不^レ存^二莆菜味^一。唯一大海味而已。

【119】況復長^二道芽^一。養^二聖胎^一之事。醍醐與^二莆菜^一。一如無^二二如^一也。有^二比丘口如^レ竈之先言^一。不^レ可^レ不^レ知。

【120】可想。莆菜能養^二聖胎^一。能長^二道芽^一。不^レ可^レ爲^レ賤。不^レ可^レ爲^レ輕。人天之導師。可^レ爲^二莆菜之化益^一者也。

【121】又不^レ可^レ見^二衆僧之得失^一。不^レ可^レ顧^二衆僧之老少^一。

【122】自猶不^レ知^二自之落處^一。佗爭得^レ識^二佗之落處^一。以^二自之非^一爲^二佗之非^一。豈不^レ誤乎。

【123】耆年晚進。其形雖異。有智愚朦。僧宗是同。

【124】亦昨非今是。聖凡誰知。

【125】禪苑清規云。僧無^二凡聖^一。通^二會十方^一。

【126】若有^二一切是非莫^レ管之志氣^一。那非^二直趣^一無上菩提^一之道業^上耶。

【127】如錯^二向來一步^一。便及對面蹉過。

【128】古人之骨髓。全在下^二作^一恁功夫^一之處^上也。

- 【130】後代掌「當職」之兄弟。亦作「恁功夫」始得。
- 【131】百丈高祖之規繩豈虛然乎。
- 【132】山僧歸國以降駐_二。錫於建仁_一一兩三年。
- 【133】彼寺愁置_二此職_一。唯有_二名字_一。全無_二人實_一。
- 【134】未_レ識_二是佛事_一。豈敢弁_二肯道_一。
- 【135】真可_二憐憫_一。不_レ遇_二其人_一。虛度_二光陰_一。浪破_二道業_一。
- 【136】會看_二彼寺_一此職僧。二時齋粥。都不_レ管_二事_一。帶_二無頭腦_一。無人情奴子_一。一切大小事。總說_二向佗_一。作得正。作得不_レ正。未_二會去看_一。
- 【137】如_二鄰家有_一婦女_二相似_一。若去得_レ見。佗及恥及瑕。
- 【138】結_二構一局_一。或偃臥。或談笑。或看經。或念誦。日久月深。不_レ到_二鍋邊_一。
- 【139】況乎買_二索什物_一。諦_二觀味數_一。豈存_二其事_一乎。
- 【140】何況兩節九拜。未_二夢見_一在。
- 【141】時至_レ教_二童行_一也未_二會知_一。
- 【142】可_レ憐可_レ悲。無道心之人。未_二會遇_一見有道德之輩_一。雖入_二寶山_一。兮。空手而歸。雖_レ到_二寶海_一。兮。空身而還。
- 【143】應_レ知雖_二佗未_一會發心_一。若見_二一本分人_一。則行_二得其道_一。
- 【144】雖_レ未_レ見_二一本分人_一。兮。若是深發心者。則行_二膺其道_一。
- 【145】既以兩闕。何以一益。
- 【146】如_レ見_二大宋國諸山_一。諸寺_一。知事頭首。居_二職之族_一。雖_レ爲_二一年之精勤_一。各存_二三般之住持_一。與_二時營_一之。競_二緣勵_一之。
- 【147】已如利_レ他兼豐_二自利_一。一_二興叢席_一。一_二新高格_一。齋_レ肩競_レ頭繼_レ踵重_レ蹤。
- 【148】於_レ是應_レ詳_下。有_二見_一自如_レ佗之癡人_一。有_中顧_レ佗如_レ自之君子_上。
- 【149】古人云。三分光陰_二早過_一。靈臺一點不_二措磨_一。貪_レ生遂_レ日區區去。喚不_レ回頭爭奈何。
- 【150】須_レ知_下未_レ見_二知識_一。被_中人情奪_上。
- 【151】可_レ憐愚子運_二出長者所_一傳之家財_一。徒作_二佗人面前之塵糞_一。
- 【152】今乃不_レ可_レ然耶。
- 【153】嘗_二觀當_一職前來有道。其掌其德自符_一。
- 【154】大滄悟道。典座之時也。洞山麻三斤。亦典座之時也。
- 【155】若可_レ貴_二事者_一。可_レ貴_二悟道之事_一。若可_レ貴_レ時者。可_レ貴_二悟道之時_一者歟。
- 【156】慕_レ事耽_レ道之跡。握_レ砂而爲_レ寶。猶有_二其驗_一。模_レ形而作_レ禮。屢見_二其感_一。
- 【157】何況其職是同。其稱是一。
- 【158】其情其業。若可_レ傳者。其美其道。豈不_レ來乎。
- 【159】凡諸知事頭首。及_レ當_レ職作_レ事務之時節。可_レ保_二持喜心_一。老心。大心_一者也。
- 【160】所謂喜心者。喜悅心也。
- 【161】可_レ想_下我若生_二天上_一。著_レ樂無_レ間。不_レ可_二發心_一。修行未_レ便。何況可_レ作_二三寶供養之食_一耶_上。
- 【162】萬法之中。最尊貴者三寶也。最上勝者三寶也。天帝非_レ喻。輪王弗_レ比。
- 【163】清規云。世間尊貴。物外優閒。清淨無爲。衆僧爲_レ最。
- 【164】今吾幸生_二人間_一。而作_二此三寶受用之食_一。豈非_二大因緣_一耶。
- 尤以可_二悅喜_一者也。
- 【165】又可_レ想_下。我若生_二地獄_一。餓鬼。畜生。修羅等之趣_一。又生_二自餘之八難處_一。

- 【166】雖有_レ求_二僧力之覆身_一。手自不_レ可_レ作_中供_二養三寶_一之淨食_上。
- 【167】依_二其苦器_一而受_レ苦。縛_二身心_一也。
- 【168】今生既作_レ之。可_レ悦之生也。可_レ悦之身也。曠大劫之良緣也。不_レ可_レ朽之功德也。
- 【169】願以_二萬生千生_一。而攝_二一日一時_一。可_レ辨之可_レ作_レ之。
- 【170】爲_四能使_三千萬生之身結_二於良緣_一也。
- 【171】如_レ此觀達之心。乃喜心也。
- 【172】誠夫縱作_二轉輪聖王之身_一。非_レ作_下供_二養三寶_一之食_上者。終其無_レ益。唯是水沫泡焰之質也。
- 【173】所謂老心者。父母心也。譬若_三父母念_二於一子_一。存_二念三寶_一、如_レ念_二一子_一也。
- 【174】貧者窮者。強愛_二育一子_一。其志如何。外人不_レ識。作_レ父作_レ母方識_レ之也。
- 【175】不_レ顧_二自身之貧富_一。偏念_二吾子之長大_一也。
- 【176】不_レ顧_二自寒_一。不_レ顧_二自熱_一。蔭_レ子覆_レ子。
- 【177】以爲親念切切之至。
- 【178】發_二其心_一之人。能識_レ之。慣_二其心_一之人。方覺_レ之者也。
- 【179】然乃看_レ水看_レ穀。皆可_レ存_二養_レ子之慈懇_一者歟。
- 【180】大師釋尊。猶_レ分_二二千年之佛壽_一。而蔭_二末世之吾等_一。其意如何。唯垂_二父母心_一而已。
- 【181】如來全不_レ可_レ求_レ果。亦不_レ可_レ求_レ富。
- 【182】所謂大心者。大_二山于其心_一。大海_二于其心_一。無_レ偏無_レ黨心也。
- 【183】提_レ兩而不_レ爲_レ輕。扛_レ鈞而不_レ可_レ重。被_レ引_二春聲_一兮。不_レ游_二春澤_一。雖_レ見_二秋色_一兮。更無_二秋心_一。
- 【184】競_二四運於一景_一。視_二銖兩於一目_一。

【註】

- 【185】於_二是一節_一。可_レ書_二大之字_一也。可_レ知_二大之字_一也。可_レ學_二大之字_一也。
- 【186】夾山之典座。若不_レ學_二大字_一者。不覺之一笑。莫_レ度_二大原_一。
- 【187】大滄禪師。不_レ書_二大字_一。取_二一莖柴_一。不_レ可_二三吹_一。
- 【188】洞山和尚。不_レ知_二大字_一。拈_二三斤麻_一。莫_レ示_二一僧_一。
- 【189】應_レ知向來大善知識。俱是百草頭上。學_二大字_一來。今乃自在作_二大聲_一。說_二大義_一。了_二大事_一。接_二大人_一。成_二就者箇一段大事因緣_一者也。
- 【190】住持・知事・頭首・雲衲。阿誰忘_二却此三種心_一者哉。
- 【191】于皆嘉禎三丁酉春。記示_二後來學道之君子_一云。
- 【192】觀音導利興聖寶林禪寺住持傳法沙門道元記。
- (1) 農林水産省ホームページ「ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食：日本人の伝統的な食文化」とは」<http://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/ich/>
- (2) 『典座教訓』について、『典座教訓』一卷 道元撰。寛文七年（一六六七）刊、嘉禎三年（一二三七）春、宇治興聖寺で撰述したもので、寛文七年刊（永平元禪師清規）の巻頭に収録。典座の一職をもつて一色の辨道となし、辨道の功德心行、古徳の先蹤等を挙示して、三徳円満し六味完備せしめる用心を論じたもの。文亀二年（一五〇二）光周書写本（永平寺所蔵）、寛政六年（一七九四）刊もある。「曹全、宗源、上」大八十二卷三三〇上」と『禪学大辞典』（P八九五 駒澤大学

内禅学大辞典編纂所編 大修館書店) に述べられている。本

論においては『大正新脩大藏經(以下『大正藏』と略す)』(巻第八二 三二〇a-三二三a) を出典として本論に挙げている。また、『典座教訓』の本文を文節に従って一九二項目に分類し、本文の返り点、現代語訳は筆者によるものであり、現代語訳はできる限り原文に忠実な直訳につとめた。また『典座教訓』の本文中の注記は、紙面の都合により一切施さず、他の機会に行うこととする。

(3) 公益社団法人 日本仏教保育協会(緑谷一雄理事長)

仏教に基づいた保育の充実を図り、仏教保育を推進するため、昭和四年に仏教系幼稚園、保育園及び養成機関の全国組織として発足し、昭和四十四年十一月十五日に文部省(当時)から社団法人の認可を得て、さらに、平成二十四年度に内閣府より公益社団法人の認定を受け、活動を続ける最も歴史の長い保育団体である。この「日本仏教保育協会」への加盟園は、一〇九九施設、幼稚園五九八園、保育園四八〇園、こども園二十一園、養成機関三十校(平成二十七年現在)である。また、「日本仏教保育協会」の基本方針は、「生命尊重の保育の確立と心の教育の推進」であり、一、生命尊重の保育推進二、活力ある日仏保をめざし会員の為の運営基盤の確立を図る 三、魅力ある日仏保を確立し会員の期待に応える 四、国際交流・社会貢献のできる日仏保をめざす というものである。

本部 〒一〇五・〇〇一一 東京都港区芝公園四・七・四
明照会館内

<http://www.buppo.com/index.html>

(4) 『幼稚園教育要領』(文部科学省) 第2章ねらい及び内容 3
内容の取扱い

(5) 『保育所保育指針』(厚生労働省) 第5章健康及び安全 3
食育の推進

(6) 石塚左玄氏『通俗食物養生法』(三省堂書店) 第四章 夫婦
重爾加里の性質効力及び結果論 「人は食を自由にするを以て
食は人を自由にす」(p二四四-p二四五) に、「是故に職業
行務の異なる目的進路の同じからざる或は智尊才卑の聖人に
君主に或は奇才兼備の賢人に偉人に或は才多智少の才子に
辨士に或は才少智劣の凡人に俗人に為さんには食育食養の適
否好悪を化学的に調攝加減して受胎分娩の期より地位天候に
準じ穀食動物の本分たる自然の天性を盡して體育修学の期に
至る迄其宜しきを得るに於ては其人と成る身體や矮卑過敏の
性とならざる雄尊沈勇の質となり従て才多智少の失策多き顕
勢力少なくして智多才少の潜勢力多くなるが故に才尊智卑の
劣等人種を壓倒する敢て難きは勿論衆を以て寡を
制する才化の機變政略に反對し寡を以て衆を御す可き徳化の
深籌雄略を得るに至るや亦之れ化学的理法に於て然らざるを
得ざる可し」と述べている。

(7) 日本仏教保育協会編『仏教保育総論』「第二講 教育の目的と
仏教保育」(二〇〇四年二月十月初版) チャイルド本社

(8) 『月刊仏教保育カリキュラム』(一九九八年八月) 日本仏教保
育協会編

(9) 佐藤達全・鶴見大学佛教文化研究所紀要 十三巻 「仏教保育

に対する保育科学生の意識変化について・「仏教保育」の授業を中心に・」

- (10) 前註(9) 掲 佐藤達全氏論文参照

- (11) 前註(7) 掲 著書参照

- (12) 『普勸坐禅儀』(全一卷、『大正蔵』巻第八二・一a)は、安貞元年(一二二七)の作であり、坐禅こそ仏道を中心であり、その実践を強調したもので、道元禅師が宋から帰国して最初の著書である。そして日本曹洞宗の坐禅の根底をなす書物である。

- (13) 「社会福祉法人白梅会御幸南保育所」(中島庸次所長)

広島県福山市御幸町中津原字片山一五八二・一

<http://niyuki-minaminet/>

「保育目標 ①心身ともに健やかな身体づくりをすすめる ②健康的で安全な環境のもとで情操教育をすすめる ③一人ひとりを大切にし可能性を最大限に伸ばす教育をすすめる ④様々な経験を通して優しい気持ちや我慢する強い心を育てる教育をすすめる」としており、この中で情操教育をすすめる中で、『典座教訓』を引用し、「食育」の重要性を説いている。

- (14) 「典座ネットブログ『禅と精進料理』」

「永平寺にて食育講演を行いました」高梨尚之師

<http://tenzonet/blog/?p=1418>

- (15) 「社会福祉法人全国社会福祉協議会」(斎藤十朗会長)

東京都千代田区霞が関三丁目三番地二号 新霞が関ビル

<http://www.shakyoo.or.jp/index.htm>

- (16) 『禅苑清規』(十巻、『卍字蔵経』二・十六・五)『曹洞宗全書』(清

規)『金沢文庫本(写真版)』は、崇寧二年(一一〇三年)刊行、北宋の長蘆宗頤撰である。中唐から宋代にかけての禅宗寺院における修行僧の生活規範である清規を集大成したもので、現存するものでは最も古いといわれている。道元禅師はこの『禅苑清規』を拠り所としている。詳細な先行研究は数多くなされており、鏡島元隆、佐藤達玄、小坂機融著『禅苑清規―訳註』(一九七二年 曹洞宗宗務庁)、酒井得元著『訳註禅苑清規』について(駒澤大学佛教学部論集三、一九七二年十二月)などを参照している。

- (17) 拙稿『月刊「仏教保育カリキュラム」・いかせいのちの保育・教育』「対機説法」・一人ひとり子どもたちを見つめて

・」(二〇一五年九月号)

【参考文献・資料】

- ・『大正新脩大蔵経』(大正一切経刊行會)
- ・『卍字蔵経』(図書出版)
- ・『曹洞宗全書』(曹洞宗全書刊行會)
- ・『禅学大辞典』(駒澤大学内禅学大辞典編纂所編 大修館書店)
- ・中村 元『仏教語大辞典』(東京書籍)
- ・鏡島元隆、佐藤達玄、小坂機融著『禅苑清規―訳註』(一九七二年 曹洞宗宗務庁)
- ・石塚左玄氏『通俗食物養生法』(三省堂書店)
- ・東隆眞博士古稀記念論文集刊行會『東隆眞博士古稀記念論集』(佐藤達全・「曹洞宗保育における保育者のあり方について」)
- ・海谷則之『宗教教育学研究』(法蔵館)
- ・上田祖峰『禅・食と心』・「典座教訓」の教えを社会生活に生かす

(二)省堂)

- ・上田祖峰『新釈典座教訓』・調理と禪の心 (圭文社)
- ・中村璋八、石川力山、中村信幸『典座教訓・赴粥飯法』(講談社学術文庫)
- ・篠原寿雄『典座教訓』(大蔵出版〔大蔵選書3〕)
- ・菅原昭英監修『口語訳 道元禅師の典座教訓』(学校法人駒澤学園)
- ・日本仏教保育協会編『仏教保育総論』(チャイルド本社)
- ・清水俊彦編著『学校教育法ハンドブック』(教育開発研究所)
- ・阿部 恵・鈴木みゆき著『教育・保育実践安心ガイド』(ひかりのくに)
- ・子どもと保育総合研究所 森上史朗監修『最新保育資料集』(ミネルヴァ書房)
- ・無藤 隆著『幼稚園教育要領の基本と解説』(フレーベル館)
- ・田中敏明著『幼稚園・保育所指導計画作成と実践のためのねらいと内容集』(北大路書房)
- ・小田 豊・山崎 晃監修『幼児学用語集』(北大路書房)
- ・『月刊仏教保育カリキュラム』(二〇一五年九月) 日本仏教保育協会編
- ・『月刊仏教保育カリキュラム』(二〇一五年九月) 日本仏教保育協会編
- ・『幼稚園教育要領』(文部科学省)
- ・『保育所保育指針』(厚生労働省)
- ・酒井得元著『『訳註禅苑清規』について』(駒澤大学佛教学部論集三、一九七二年十二月)
- ・佐藤達全・鶴見大学佛教文化研究所紀要 十三卷「仏教保育に対する保育科学生の意識変化について」、「仏教保育」の授業を中心に」

- ・橋本弘道・鶴見大学佛教文化研究所紀要 四十八卷「保育者養成の観点から見た仏教保育と教育の原理」
- ・佐藤達全・育英短期大学研究紀要 第十四卷「人間教育の原点と仏教保育について」
- ・農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/ich/>
- ・社会福祉法人白梅会御幸南保育所 <http://miyuki-minaminet/>
- ・典座ネットブログ・禅と精進料理 <http://renzonet/blog/?p=1418>
- ・社会福祉法人全国社会福祉協議会 <http://www.shakyo.or.jp/index.htm>
- ・公益社団法人 日本仏教保育協会 <http://www.buppo.com/index.html>